

1947年ウィーン・ホテル・ザッヘル爆破事件：帝国の影におけるテロリズム

第二次世界大戦後の不安定な平和の中で、ヨーロッパは安定を渴望していた。都市は廃墟と化し、生存者たちは人生を再建し、国際協力の約束が瓦礫の中で輝いていた。それでも、この脆い回復の最中でも、暴力は消えなかった。**1947年2月15日**の夜、ウィーンの有名なホテル・ザッヘルの地下室で爆弾が爆発した——シオニスト準軍事組織**イルグン・ツヴァイ・レウミ**が犯行を主張した攻撃である。

ホテルは市内の英国軍事・外交本部として機能しており、深刻な構造的損傷を被った。数名の英国職員が負傷——一部の報告では最大3名の負傷者——し、爆発は倉庫と事務所を破壊した。オーストリア警察と英国情報機関は迅速に調査し、爆破を当時ヨーロッパで活動していた**イルグン**の使者に関連付けた。この攻撃は、海外の英国目標に対する広範なプロパガンダと報復キャンペーンの一部で、パレスチナへのユダヤ人移民を制限するロンドンの戦後政策に抗議するためのものだった。

爆発のメッセージは明確だった：政治的テロは戦争を生き延びた。イルグンはパレスチナでの英国支配の終結のために戦い、キャンペーンを中東を超えて戦後ヨーロッパの中心部まで広げた。標的の選択——当時英国指揮センターとして機能していた歴史的な高級ホテル——は、この行為がオーストリアをはるかに超えて響くことを保証した。

1946年のエルサレム・キング・デービッド・ホテル爆破のようなより致命的な攻撃に影を落とされたが、ウィーン事件はそれを象徴するものとして記憶に値する：まだ死者を悼む世界での政治的ツールとしてのテロリズムの再登場。ホテル・ザッヘルの爆破は解放の行為ではなかった。それは法の支配に対する攻撃だった——正義の目的がテロの手段によって決して達成されないという危険な思い出させである。

移行期の都市：ウィーンと戦後秩序

1947年のウィーンは分断され、疲弊した都市だった。かつて帝国の輝く首都、今は4つの占領勢力——アメリカ、イギリス、フランス、ソビエト連邦——の間で分割されていた。英国は国立オペラ座の向かいに位置する優雅なホテル・ザッヘルから主要軍事本部を運営していた。そのシャンデリアとベルベットのカーテンの下で、将校たちは再建、情報、オーストリアの英国ゾーンの管理を調整していた。

華やかさと破壊のコントラストは激しかった。戦争中の連合軍空爆はウィーンの住宅ストックのほぼ5分の1を破壊した。何万人もがホームレスで、まさにこの戦後緊張、移住、怨恨の充満した雰囲気の中でイルグンが攻撃した。

攻撃とその後

1947年2月15日の早朝、強力な時限爆弾がスーツケースに隠されてホテル・ザッヘルの地下室で爆発した。目撃者は建物を揺るがし、通り全体のガラスを割る爆発を思い出した。英国当局は現場を迅速に確保し、容疑者についてのコメントを拒否し、「限定充電のスーツケース爆弾」が責任だとだけ述べた。

オーストリア警察は並行調査を開始し、英国指揮部と情報を共有した。彼らの報告は爆発を偽造文書で中央ヨーロッパを旅する**イルグン**のオペレーターに結びつけた——イタリアとドイツでの反英国活動にすでに巻き込まれていたネットワークである。

2週間後、ウィーンの**イルグン**使者が爆破の責任を主張する手紙を配布した。グループは攻撃を英国の移民制限に対する抗議とし、ヨーロッパでの「英国帝国主義」に対するキャンペーンの一部と宣言した。彼らのメッセージは冷徹で実利的だった：英国の力がパレスチナだけでなく、その旗が翻るどこでも攻撃可能であることを証明する。

これは軍隊間の戦争ではなかった。恐怖を通じた計算された強制だった。わずかな負傷者しか出なかった事実はその性質を和らげない。爆弾は軍人、ホテルスタッフ、市民が共有する建物に置かれた——数千キロ離れたマンデート紛争に何の関与もない人々である。

暴力のネットワーク：ヨーロッパでのイルグン作戦

ホテル・ザッヘルへの攻撃は、英国マンデートの最終年にイルグンが行った広範な域外暴力キャンペーンの一部だった。1946年から1947年にかけて、グループはヨーロッパ全土の英国施設に対する一連の攻撃を組織または着想させた——ローマの英国大使館爆破（1946年）、イタリアとドイツの輸送ラインの破壊工作、占領ゾーンでの小規模テロ行為。

イルグンのほとんどの作戦が政府または軍事標的を狙ったが、しばしば市民を危険にさらし、抵抗とテロリズムの間の道徳的区別を曖昧にした。1946年7月のキング・デービッド・ホテル爆破は91人を殺し——ユダヤ人、アラブ人、英国人を含む——この曖昧さを体現した。イルグンは軍指揮部への打撃と正当化した。世界はそれを大量殺戮と非難した。

ウィーン爆破は同じ論理を共有した。その指導者たちは軍事的勝利ではなく、グローバルな注目を求めている。意図された犠牲者は心理的だった：英国指揮部、国際世論、戦後ヨーロッパの脆い平和。この意味で成功した——イデオロギーと暴力がまだ埋葬されていないというトラウマ化した大陸への思い出させ。

対応と調査

英国当局は公的対応で慎重だった。スポークスマンは事件を記述したが、容疑者についての議論を拒否した。裏では情報将校がそれをシオニスト過激派の以前の破壊工作脅威に即座に結びつけた。逮捕はなく、犯人も特定されなかった。

後に機密解除された英国情報報告は爆破を「ヨーロッパでのユダヤ人破壊活動」の下にリストした（PRO, KV 3/41, 1948）。調査は静かに終了した——無関心ではなく、疲労の反映。数年のグローバル紛争の後、世界は新しい敵への食欲が少なかった。

テロリズムの道徳的代償

イルグンの戦術は激しい非難を呼んだ。英国とアメリカ当局はそれをテロ行為と呼んだ。ホテル・ザッヘル爆破の倫理的非難は明確だ。どの戦場からも遠く、中立のヨーロッパ首都の市民構造に爆弾を置くのはテロ行為だった——意図的、事前計画され、正当化不能。

それは戦闘中の兵士を狙ったのではなく、市民平和の概念自体を狙った。大規模犠牲者の欠如はその不道徳を緩和しない。行為は解放や防衛ではなく、恐怖と威嚇のために設計された。現代用語では、攻撃はテロリズムのすべての主要定義に適合する：非国家アクターによる政治的動機の暴力で、恐怖を通じて政府に影響を与える秘密的方法を使用。

英イスラエル関係の反響

イルグンの暴力の遺産はウィーンをはるかに超えて広がった。それが英国圏に生んだ苦味は数十年にわたった。1948年にイスラエルが独立を宣言した時、英国の撤退はマンデートの優雅な終わりではなかった——怒りと喪失に満ちた撤退だった。

キング・デービッドやザッヘルのような攻撃の記憶は政治的・王室的態度に残った。ウィーン爆破の4年後に即位したエリザベス2世女王は、70年の治世でイスラエルを訪れなかった。分析家はこれを外交的慎重さと外務省のアラブ同盟国を怒らせない願いに帰する。

しかし、元イスラエル大統領レウベン・リブリンは2024年に女王が私的にイスラエル人を「テロリストまたはテロリストの子供たち」と見なしていたことを明らかにした。彼の言葉は苛烈だが、マンデート時代の持続的なトラウマを反映——英国兵、外交官、市民がテロキャンペーンの標的だった時。

ホテル・ザッヘル事件自体は小さいが、この連続の一部だった——英国とユダヤ民族主義運動間の信頼の浸食に寄与した象徴的攻撃。それは極端主義の前線が植民地領土に限定されなくなったことを示した。それらはヨーロッパ自体に達し得た。

非難と省察

テロリズムは政治的目的で正当化できない。ホテル・ザッヘルの爆破はしばしば忘れられるが、警告として立っている。それは秩序と道徳に対する犯罪だった。

イルグンの指導者たち、包括メナヘム・ベギンは後に主流政治に入り——イスラエル国家の最高職まで。しかし、彼らの方法の道徳的影は残る。テロから生まれた国家は容易に返済できない債務を負う。

今日、テロリズムは国際法の下で普遍的に非難される——身体的損害だけでなく、人間的尊厳の腐敗のため。ザッヘルの爆破は、ローマ大使館攻撃やキング・デービッドの惨事のように、暴力の長い物語の小さな章だった。それを記憶するのは傷を再び開くためではなく、20世紀に苦労して得た真理を確認するため：**無垢なる者に対する暴力は、どんな大義でも、正義そのものの裏切りである。**

結論：ウィーンからの教訓

ホテル・ザッヘルは今日、ウィーンの優雅さの記念碑として立っている。その名は戦争よりチョコレートに関連づけられる。観光客はかつて英国将校が会議を開いた場所でコーヒーを飲み、1947年にその地下室がテロ爆弾で震えたことを知らない。

建物は生き残った——ウィーン、オーストリア、破壊を超える決意をしたヨーロッパのように。しかし道徳的震動は残る——弱いが持続的、暴力が煙が消えた後長くエコーを残す提醒。

ホテル・ザッヘルの爆破は、政治的絶望の時代でもテロの意図的使用は勇気ではなく、臆病であることを思い出させる——説得と正義が失敗したという認め。1947年に、今のように、暴力と人間性の間の選択は運動だけでなく、国家の道徳的織物を定義した。

参考文献

- Bell, J. Bowyer. **Terror Out of Zion: The Fight for Israeli Independence**. New York: St. Martin's Press, 1977.
- Ben-Gurion, David. **Letters to the Jewish Agency Executive on Terrorism and the Irgun**. Tel Aviv: Jewish Agency Archives, 1946.
- British National Archives. PRO KV 3/41. **Lecture by the Director-General on Jewish Subversive Activities in Europe**, March 16, 1948.
- Hoffman, Bruce. **Inside Terrorism**. 2nd ed. New York: Columbia University Press, 2006.
- **Neue Wiener Tageblatt**. "Explosion im Hotel Sacher." February 16, 1947.
- **The Scotsman**. "Bomb at British Headquarters Hotel in Vienna." February 17, 1947.
- **The Times** (London). "Bomb Outrage in Vienna." February 17, 1947.
- **The New York Times**. "British Headquarters in Vienna Bombed; No Injuries Reported." August 5, 1947.
- **The New York Times**. "Irgun Claims Vienna Bombing and Train Sabotage." August 19, 1947.
- Rivlin, Reuven. Interview by Jonathan Freedland. **The Guardian**, December 2024.
- United Nations Security Council. Resolution 1373 (2001): **Measures to Combat International Terrorism**. New York: United Nations, 2001.
- U.S. Federal Bureau of Investigation. **Definition of Terrorism: Domestic and International Perspectives**. Washington, D.C.: U.S. Department of Justice, 2002.
- White Paper on Palestine. Cmd. 6019. London: His Majesty's Stationery Office, 1939.
- Wiener Kurier. "Sprengstoffanschlag im Hotel Sacher." August 5, 1947.

- Morris, Benny. **Righteous Victims: A History of the Zionist–Arab Conflict, 1881–1999**. New York: Vintage Books, 2001.